

日本洋書協会会報

Vol. 34 No. 1 (通巻392号) 2000年1月

謹んで新春の

お慶びを申し上げます

2000年1月



理事長 鈴木信夫

皆様2000年明けましておめでとうございます。

年初のお忙しい中を多数お集まりいただき、また昨年よりも2割強という大勢の方々にお集まりいただき、たいへん嬉しく感じているところでございます。

昨年、日本洋書協会と名称を変えて名実ともに新しい年を迎える、本日はその新年会でございます。只今齋藤文化厚生委員長からご案内がありましたが、本日は、日本出版取次協会会長の上瀧博正様、ならびに日本雑誌協会理事長の石川晴彦様、さらに日本書籍出版協会から専務理事の五味俊和様にご来賓としておいいただきました。ご出席誠に有難うございました。心から御礼申し上げます。ご来賓の皆様方は日本の出版界を背負っておられる方々であり、またご来場の皆様方は日本の洋書業界を背負っている方々でございます。

さて、2000年と申しますと20世紀の最終年ということにもなるのですが、やはり最終というよりは何かが始まるほうが口当たりの良い言葉になるのではないかと思います。いろいろな所で聞く言葉はやはり1900年代が終わり2000年代が始まる年という、「始まる年」のところに意味があるように思います。そこで、この節目に際して若干振り返ってみますと、我が洋書協会は昨年の3月までは洋書輸入協会という名前でございました。戦後日本の敗戦による荒廃の中、その復興のために、欧米先進国の先端的な知識や技術を取り入れるために、あるいは文化を戦後日本の復興の知恵として使うために、皆さま方が本当に長い間、50年間とってよろしいかと思いますが、ご努力をなさいました、その過程でこの協会が生まれました。私も創立当時のことはよく分かりませんが、

目次

新年の挨拶 鈴木理事長	1・2	理事会・委員会報告	4・5	新しいミレニアムは日本から発信?	6・7
2000年紀の幕開けを迎えて	3・4	うちの会社	5	広告	8

現在会報にその歴史を振り返るエッセイが載っております。そうした、協会の活動の中で現在のビジネスとの関わりで一番深かったことは、やはり海賊版という輸出版物に関わるコピー問題でございました。今ほどコピー機が普及していませんでしたから、コピーそのものが実は出版活動としアンダーグラウンドに行われるというような事実が実際上ありました。そうした、我々のビジネスの阻害要因を如何に排除するかということが当時の洋書輸入協会の最初の大きな仕事であったと思います。同じように、様々な形の、例えば外貨の割り当ての問題とか、当時この商売を行うために必要であった政治的・経済的な支援、あるいは秩序作りといった事柄に多くの力を発揮して、この協会の歴史が今日まで刻まれて参りました。

その後の日本の発展の中で我々の成長もありましたし、我々の企業の基盤作りもあった訳ですが、今日の状況を端的に表現するといたしますと、出版の電子化ということの中に全てが説明され得るような気がいたします。特に出版物の著作権問題といいますが、コピー問題が新たなテーマとして生まれてきております。これからの、特に2000年以降のそうした新しい技術と出版という分野における秩序とが我々のビジネスに如何なる関わりを持つのかということをお考えすると、阻害要因も含めてたいへん新しい材料が沢山出てきております。そうした状況に対して我々がこのビジネスを進める上で必要なことを、日本の出版界全体の課題の中の一つとしてこれから取組んで参りたいと思います。それがこの新生JAIPの大きなテーマになるのではないかと考えます。

次に、実務的な次元で昨年一年間協会として取組みましたことを多少おさらいをさせていただきますと、一つはダイレクター委員会に主たるお願いを致しましたが、遅いということにはなろうかと思いますが、洋書協会としてのホームページを今年はオープンいたします。つきましては、皆様方でそのホームページの内容のクォリテイを高めていくために、ぜひご協力を賜りたいと存じます。当初はダイレクターそのもののコストの合理化のために始めた作業ではございますが、実質的にはそこに開かれたホームページが日本のマーケットにおける洋書および外国雑誌あるいは新しい媒体に関わるビジネスについていろいろなテーマを持つだろうというふうにお考えます。そうした様々なテーマが協会のホームページを通じて覗ける、また海外からそのホームページを通じて皆

様方のデータベースにリンクする、皆様方の会社にリンクするという展開に持って行ければと考えております。ぜひ皆様方の積極的なご協力の下に、日本でこの種のビジネスに携わっている人々にアクセスするにはJAIPのホームページが一番いいという評価を得られるような、高いクォリテイを持った内容に育てて頂きたいと思っております。それが今年は立ち上がります。

それから、共同物流に関わる幾つかの調査と実験を行い、相当時間がかかりましたが、昨年末に6社の会員の方々がこの企画へ参加の名乗りをあげて下さいました。そこからスタートさせます。ぜひ皆様方にもご興味がありましたら、お使い頂けるかどうかということをご検討頂ければと考えます。ホームページの開設と共同物流の二つについてのみ本日は申し上げましたが、さらに詳しくは5月の総会の時に改めてご報告したいと思います。

さて、今年のテーマの中で一番大きいものはやはり消費税だろうと考えております。現実には、課税業者と非課税業者という差別がどう見ても公正な取引を阻害しているというように判断せざるを得ないという我々の考え方、他方その点に関する法制当局あるいは大蔵省の判断ないし税務当局の考え方が、一致する所とそうでない所があるという問題であります。もちろん、マーケティング上の団体行為となりますと違法行為でございますので、十分に公正取引委員会様のご指導を頂きながら、我々が現実を受けている公正取引上のいわば差別とでもいいますでしょうか、それに対する公正なご判断を頂戴するという方向で、消費税問題を追求してみたいと考えております。

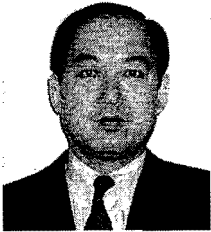
それ以外に昨年は、例えばエルゼビア社の円建問題などがありました。協会として直ちに説明会を開き素早い反応ができたと思いますので、今年もぜひ、皆様方が情報として共有したほうが良いと考えるものにつきましてはできるだけ同様の機会を設けることによって、会員の皆様方にお返しできればと考えております。

幾つか言い残したことも多いかと思いますが、時間も貴重でございますから、この辺で本年の協会の計画に関わる幾つかの手がかりのようなものを申し上げたところで、あとは皆様方の積極的なご参加とご協力を期待してお待ちしたいと思っております。それでは2000年のスタートを祝い皆様方のご健勝とお仕事のご隆盛を祈念いたしまして、「おめでとう」という言葉で乾杯を致したいと思います。

(新年賀詞交換会での挨拶から採録しました。)

〈2000年紀の幕開けを迎えて〉

—理事の皆さんに抱負を語っていただきました—



新年おめでとうございます。厳しかった一九九〇年代が終わり、二千年という大きな節目の年を迎えました。相変わらず厳しいビジネス環境ですが、新しいミレニアムを迎え、気持ちを新たに元気よく仕事に取り組んでおられること

と思います。

当協会も名称が変更され、新しい仲間も増え、活動が活発になってきました。理事会では毎回理事長が出席され、リーダーシップを発揮されているので、私を含め理事はうっかりさばれません。協会の仲間と一緒にもっと何かをやろうという気運が出てきました。今年も出来るところは力を合わせて仲良く元気にやっていきましょう。本年もどうぞよろしくお願ひします。

渡辺正憲

洋書輸入協会から日本洋書協会と協会名を改訂され新しく生れ変わって再出発の意気込みを何となく感じ乍ら平成12年、2000年のミレニアムを迎えました。

昨日の延長が今日であり今日の延長が明日につながるとは一概に言えないと同様、10年前の日本は経済大国世界第一位と、極めて楽観的に右肩上がりの経済が当然のものと思っておりましたがそれはバブルと云う言葉に表されるには余りにも大きな経済のダメージでした。

この窮境を辛くも脱しつつ21世紀の幕開けを間近にひかえた今、これまでとは違った意味での厳しいリストラクチャリングを進め自力回復をはかることが企業に必要とされる様に感じます。このことは我が業界にとっても只独り免れうる事が出来ないことと考へます。今年こそはより一層会員の皆様と互いに力を合わせて業界の体質改善、活性化に努力し直面する課題に取り組んで行きたいと思ひます。

大きな節目として20世紀と21世紀の境目の辰(竜)年に因んでこれら課題の解決がまさしく画竜点睛となるのではないのでしょうか。

中林三十三



洋書の輸入は遠く明治時代に溯り、丸善がいち早く西洋文化や技術を書籍として輸入販売したことはよく知られています。西洋文化の輸入は他の商品、たとえば外車や輸入食品におけるヤナセや明治屋が、我国の富裕層や知識階級が

上客であったことと似通っており、洋書輸入もひとつの文化ではなかったかと考へられます。

今日では洋書輸入販売は他の商品と同様に単なる流通業の一つとなり、その価格とスピードが第一に求められております。しかしながらこの現象は単に海外で作られた商品をそのままお客様に提供しているということです。海外の文化や技術をそのまま移転するだけでなく、日本のお客様が求めるコンテンツを出版社と共同で制作し、これらの商品を迅速にかつ正確に適正な価格で提供していく事が求められております。

世はグローバルなインターネットの時代、我々にもきっと次の飛躍のチャンスが来るものと信じております。

山川 隆司



「好不況は世の常」とはいえ、国のほぼ全企業を巻き込んだ過去10年余りの不況の要因が、実は国際社会でもはや整合性を失った日本の社会産業構造にその病根があった事を我々はどうしてもっと早く気づかなかったのでしょうか？

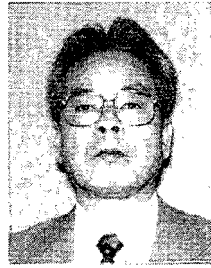
幸いにも私共は協会設立当時に策定された規約と、今日あるべき協会の姿と体質の見直しの必要に気づき、昨年その改善が果たされました。今年は、昨年に引き続き、文化厚生、会員増強両委員会を通じ、委員及び全会員の協力を得て、協会活動に非力乍ら奉仕させて頂く所存です。

齋藤 純生



日本人は世界の主要先進国のなかで多分一番外国語に弱い国民ではないかと思えます。国民の本離れ、洋書離れが危惧される昨今、21世紀を担う世代が少しでも本に触れ、外国語に親しみ、文化的にも学術的にも日本の国際性を更に高めることは国家的な使命です。当協会としては関連する出版関連業界と連携し、これらの問題に取り組む、洋書の普及と適切な流通体制の確立、ならびに著作権の保護を目的としてその事業を推進することが益々重要となってきました。会員各社のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

金原 優



西暦2000年のお正月、あれもこれもと持ちきれないほどの願い事を車に乗せ、伊勢神宮に参拝してきました。大きくは世界から戦争や飢餓がなくなりますように、小さくは私のパソコン操作が上達しますように。それらの願い事のなかに日本洋書協会がその会員共々さらに充実発展しますように、も当然ありました。大きな会社も小さな会社も分に相応し、共存共栄できる環境が醸成されますように。神様も大変でしょうがお願いします。

坂下幸雄

(新田・鶴岡理事のコメントは2月号に載ります。)

理事会報告

12月20日(月)

1. ㈱日新の賛助会員入会を承認した。
2. 以下の報告を了承した。
 - ・2000年の幕開けにあたり会報1月号を記念号とし、全理事のコメントを掲載する。また慶賀に相応しい刷り色とする。(会報委員会)
 - ・和書出版関連4団体の代表者に新年賀詞交換会への招待状を送った。(広報・交渉委員会)
 - ・東京国際ブックフェア「オランダ年」ブースの運営にあたり、日本書籍出版協会及び日本出版取次協会の全面的な支援が得られることになった。(事業委員会)
 - ・新年賀詞交換会の出席者数は前回は大幅に上回る見通しである。(文化厚生委員会)
 - ・第2次勧誘を正・賛助併せて10数社に対して実施する。(会員増強委員会)
 - ・「共同物流」への参加は最終的に6社となった。実施に向けて12月17日に実施説明会を開いた。(事務局)
3. ダイレクトリー電子化にあたり、システム開発及び維持・管理費用の負担を新たに会員に求めることは当面避ける。
4. ユサコ(㈱樋渡取締役より「消費税問題に関する関係省庁の見解」について経過報告があり、この問題への対応を新年度の課題とすることとした。

委員会報告

〈ダイレクトリー委員会〉

ダイレクトリーの電子化 順調に進行中

ダイレクトリーの電子化は順調に進行中ですが、1月13日開催のダイレクトリー委員会会議で、進捗状況と今後の予定が次の通り確認されました。

- ・会員名簿—1999年版の内容で完成。
- ・代理店出版物リスト—テストデータを、現在7—8社から収集中。2月末までに評価版を完成。
- ・3月初旬に会員の仕入担当者を対象に説明会開催の予定。

新会員を紹介します

会員社名：株式会社 日新
 東京都千代田区三番町5
 Tel:03-3238-6645 Fax:03-3238-6618
 代表者：代表取締役社長 筒井 博氏
 主要事業：航空・海上運送、通関、倉庫業 他
 入会日：2000年1月1日
 会員資格：賛助会員

よろしくお願いします。

フォーティ・ラブ秋季合宿報告

些か旧聞に属するが、昨年の11月6日に秋季合宿を常宿のひとつの津久井湖プチビラにて開催した。折からの産業状況の反映のためか、秋の学会シーズン真っ盛りのためか参加者は20名には届かなかったが、初参加の飯島さん（ユサコ）も、テニスを始めて3年とは到底思えぬ腕前を発揮されていた。

茨城キリスト教大学の島岡教授は、『洋書輸入協会会報』の中で、「パソコン・音楽・スポーツ——高齢者の楽しみ」（Vol. 32 No. 12 1998年12月号）という一文をお書きになっていらっしゃる。それを再録すると——『体育専門の同僚の先生に聞いたところでは、年をとってもエンジョイできるスポーツは、一つはテニスでもう一つはスキーだそうだ。』とある。私事で恐縮であるが、私も劉さんという超70才の人と時々プレイすることがあるが、年を感じさせない腕前に感服している。何故このようなことを書いたかと言うと、実は飯島さんが、このクラブは出版健保のテニス大会の様な激しいクラブだと思われて躊躇っていらしかったからである。年配者が

若者に勝つこともしょっちゅうあるクラブであることを述べたかったのである。これを読んで「我こそは」と思う若者たちの参加を待っている。

今年度の合宿は、4月・6月・8月・11月とまだ4回しか開催していない。従って、あと一回開催しなければならないが、それは、2000年3月4日に湯河原の合宿として予定している。車だと東京から東名経由で90分～100分。また、東京駅からJRの各駅停車で約一時間半、運賃も1,620円と手軽に行けると思う。（新幹線を使えばもっと早い。）南斜面の温暖な地でのテニスの後の温泉ときたら本当に楽しそうだ。折しも湯河原温泉では「梅の宴」と称して観光協会が“湯河原温泉芸妓の舞”等さまざまなイベントを計画しているようである。とりあえず約3000本の紅梅・白梅が咲き競い合う湯河原梅林なども一見の価値があるだろう。乞うご期待!!

因みに、その後の2000年の合宿も来年度になるが計画中である。4月の2週目か3週目には慣例の津久井湖の“花見合宿”。5月20日（協会総会予定日の翌日）の“箱根合宿”などである。今年も楽しい合宿を開催していきたい。（フォーティ・ラブ幹事 柴田厚生）

うちの会社

ユサコ株式会社

東京都港区東麻布2丁目17番12号

Tel : 03-3505-6161 Fax : 03-3505-6281

ユサコ株式会社（英文名—USACO CORPORATION）は西暦2000年に創業50周年を迎える洋書輸入業界の老舗であります。ユサコの起源は昭和9年に遡り、故山川隆雄会長が創業した山川商会から数えると、第二次世界大戦中の中断期を除けばほぼ60年の歴史を持つ会社で、戦後、1950年にユー・エス・エシアテック・カンパニーとして再発足、1983年に現在の社名であるユサコ株式会社となりました。戦前より一貫して科学技術、医学分野の外国雑誌や専門書の輸入に携わり、今日でもこの分野が当社の主力販売商品でありま

す。

1968年に米国ISI社と総代理店契約を結び、これを機に情報サービス産業に参入、今日のインターネット時代にマッチしたサイエンス・インフォメーション・サービスを印刷物から電子メディアに至る広いメディアでネットワークする会社となりました。21世紀の更なる発展のための基礎作りとして、昨年12月、当社はオフィス了新橋より東麻布に移し、次の世代による今後のユサコの発展を目指しております。

山川 隆司

新しいミレニアムは日本から発信？

島岡 丘

新しいミレニアムに突入した。心配された Y2K 問題もどうやらクリアできたようだ。1000年に一度しか訪れない人類の歴史に直面して、心ある年輩者はより良い1000年史が描かれるように、どのような舵取りをするかを日々考えているようだ。

息子と娘が「ミレニアムってなに？」と聞いて来たら、親は、それは1000年という意味だよ。」と答え、2000年はキリストの誕生から2000年目になると答えるだろう。一般にはそれで良いのだが、しかし、実際のキリストの誕生は、その後の調査で、西暦前2年か3年らしく、しかも誕生は12月でなく、秋であったらしい。また、キリストの誕生について書かれた聖書の記事はキリストの死後30年くらい経ってから、つまり、西暦60年頃とされている (cf. *MAINICHI WEEKLY* 12・11号)。

西暦999年から1000年に変わり目ではどうであっただろうか。ヨーロッパは当時暗黒時代であり、さまざまな憶測や根拠のないデマが流布し、それらに惑わされて一部の人たちはパニックになったようだ。社会不安から、自殺者や他殺者が出たり、自分の家を焼き捨てて遠く巡礼に旅立った人もいたようだ。しかし、実際には何も起こらなかった。われわれも冷静に2000年を受け止めよう。

実りある思考を進めるとき、4つの思考行程一定義、対象、研究方法、価値感が必要とされると歴史家 R. G. Collingwood (R. Mackin 編、*English Studies Series* [OUP] に引用) が提案している。定義をはっきりさせるために、まず、millennium を検討しよう。はじめの mil はローマ人たちが話していたラテン語の1000という意味であり、その次の en は「年」を意味する annum と関係する。つまり、1年の形容詞は annual で2年の形容詞は biennial となる。隔年交渉は biennial negotiation である。最後の um は「博物館」を意味する musium 「(古代ローマ最大の) 円形競技場、コロセウム」を意味する Colosseum などと同じく、名詞の語尾である。もし英語学習者であれば注目させたい事柄である。

このようなことを、孫がいれば説明してやりたいものだが、息子と娘にも「まごまごしないで孫を作れ」と言うのであるが、「下手な洒落はやめな洒落」と逆襲される。中学生の孫でもいれば、millennium の e は [e,

エ] と発音され、[i:, イー] と発音されないことを後続の子音文字が一つか二つかで決まる、これは例外のない規則で dinner と diner, supper と super などと比較すると明らかになることなど教えておきたい。

いずれにしてもこれからの1000年は、これまでの量的拡大ではなく、質的変革を伴った世界になりそうである。新しい千年は果たしてどんな世界を迎えるであろうか。情報のグローバル化によって日本からの発信も多くなるのではないだろうか。

現在、日本からの発信で第一に注目されているのは、アニメとマンガである。ドラえもん、ポケモン (pockémon)、ピカチュウはいずれも日本の文化を反映していると思われる。いずれも善玉であり、これまでアメリカのモデルは、悪玉の支配をくい止めるべく力の対決が描かれ、映画は特にバイオレンスの描写が中心であった。平和な家庭にテレビを通して、過激な暴力シーンを見せることはあまり良いことではない。力を誇示するアメリカ悪玉が変わって、日本からのアニメは実にかわいらしく、親しみが持てるのかもしれない。少なくとも人間の心情をよりなごやかにまた協調的なものにすると思う。

第二の日本からの発信はさまざまなハードの面にある。乗り物について、たまたま個人タクシーの運転手から聞いたのであるが、4年間乗って走行距離は30万キロを越えても、一度も故障しなかったそうだ。また、カメラやファックス、テレビ、パソコン、ビデオ機器、さらにブレイステーション、ロボットなどの商品も品質では世界一流である。なぜ優れた商品が日本で生まれるのだろうか。それには、お客さまに奉仕するという気持ちが徹底しているためではないかと思う。

第三の日本からの発信はインターネット革命である。この分野ではアメリカが進んでいるが、日本も急速にアメリカに近づいている。26年前、私の勤めていた筑波大学では新入生全員にパソコン活用による「情報処理」を必修科目として履修させたことは正しい方向だったと思う。これまではグーテンベルグの印刷機の発明以来、安い紙を使って印刷物を大量生産していたが、資源の枯渇、書籍の搬送などコスト面の問題が生じている。これからはインターネットを通し、紙を使わず、パソコン画面で情報をやりとりできることになる。「なる」だけでなく、「生み出す」ようにしなければならないのかもしれない。

今や世界はインターネットで結ばれ情報の通信が瞬時に行われるようになってきている。このことは心の持ち方に

も影響を与えた。世界が一つに繋がっているという意識は人々に希望と勇気を与えるものである。内弁慶、いじめ、などはほとんどすべて孤立した中で起きている。小学校のいじめは子供だけの世界が教師や社会から隔離されたところで起きている。日本語には「お互い様」という言い方がある。この表現は人類連帯意識を反映したもので、インターネット革命は日本人のお互い様の意識を具現化したものとも言えよう。

第四の日本からの発信は公害の解消である。高速道路が伸び交通機関が充実するのは良いことではあるが、それと共に排気ガスの問題や騒音問題が起きる。排気ガスの問題はそれを吸収してくれるタイヤがもう実用化されているし、騒音公害も道路にクッション性の高いセメント舗装によって30デシベルは減らすことが出来、既に日本の一部の地方で実用化されている（NHK テレビ12月17日放映）。これらは海外に輸出されれば大いに歓迎されるものであろう。

第五の日本からの発信は衣食住である。日本の丹前は湿気の多いところではとても涼しくて気持ちがいい。着るものは国別よりもむしろ理にかなった服装が広まるであろう。旅行カバンがデパートなどでよく売られているが、腰痛などの車社会の現代病を防ぐために昔のリックが見直されてほしい。手荷物の代わりにリックを背負うと両手は自由になるだけでなく、背筋が伸びて気持ちがいいことに気づくであろう。食文化も日本食が海外でもてはやされる。もう少し安くなればもっと普及するであろう。また量の生活もファンが増えるであろう。

もう一つの日本からの発信は日本語である。アメリカに留学した日本の高校生がクラス一番になるのは算数のクラスだそうだ。それは日本語の九九があるためであると思う。世界に多くの言語があるが、日本語ほど規則的に数を数える方式は他にはないのではないかと思う。1から9までの数を覚えたら2桁の数字は10にそのまま付け加えればよいのである。その上、音節構造が子音+母音であるからスピーディに口調良く言えるという利点がある。英語話者も日本語の九九を覚えると良いのではないかと思う。試みに次のような日本語と英語との対応を考えてみよう。

1 (each) 2 (knee) 3 (sun) 4 (she) 5 (go) 6 (lock) 7 (sh'each) 8 (hutch) 9 (cue) 10 (d'you)

答えが一桁だと2×2が4のように主語表示語の「が」

が用いられるが、述語動詞をつける必要がない。2×5 10は答えが2桁なので、は、knee×go d'youと言えることになる。さらに百(=he'ac')、千(=sen')、万(=man)、億(=oak)を加えると日本語を知らない人でもほとんどすべての数を言えることになる。

文字については、もし、カナ文字の濁音と清音の表示に注目すれば、pbfvはそれぞれ2文字で表すことが出来る。すなわち、pbはフに丸か濁点をつけて表わすことができる。同様にfvはウに丸か二点とすると、プ、ブ、ウ^o、ヴとなる。これまではwhの音もfの音もどちらも「フ」で表していたがそれでは英語音を日本語で表すことができないことになる。[dz]と[z]を一つの文字で区別できることも日本語の優れた表記の一例である。前者はヅで後者はズとすればよい。また、GとZとの区別もカナ表記でヂーとズィーで区別できる。

世の中にはさまざまな考え方の人がおり、発音記号という問題を取り上げるとその考え方が明らかになる。発音記号不要論はいっさい発音記号を用いないでよいという考えの人たちであって、英語の教師はそのような考え方を持つ人はいないであろう。第二番目に発音記号だけでよいという人たちである。今用いられている表記は簡易表記であって、帯気音を伴うP、伴わないP、唇を閉じたままいう未開放のPの三種のPを区別していない。

私の考え方は発音記号は単語につけたものであり、決して談話の中の発音ではないので気をつける必要がある。そこで日本語で近似値としてカナ表記を付け加えれば発音の不安は解消する。

2000年は1000年の変わり目である。この1000年に1回しか来ない年を迎えて、何か新しい考え方をプロジェクトによって実行に移したいものである。新しい考え方は意外にもこれまで見過ごしていたところにあるのかもしれない。(茨城キリスト教大学教授)

訂 正

先月号「曙」に以下のような誤りがありました。
お詫びして訂正します。

訂正箇所：12月号 4頁22行目

誤：you high eastward eastward

正：yon high eastward



1950年、現在のユサコは、
〈ユーエス・エシアテック・カンパニー／外国雑誌輸入部〉として
7名の社員で新橋一丁目で産声をあげました。
2000年、ユサコは、東京本社・東京営業所・関西東海営業所・
筑波営業所に総勢70名のスタッフが業務に携わっております。
そして創業からちょうど50年という節目となる今年、
ユサコは、東京都港区東麻布の自社ビルに本社を構え、
新たな気持ちで来たる21世紀を迎え、
皆様のお役に立ちたいと願っております。

Knowledge and Information Transfer
USACO[®]
PRINTS DATABASE SOFTWARE

〒106-0044 東京都港区東麻布2-17-12
Tel.03-3505-6161 (大代表) Fax.03-3505-6281 (大代表)
ユサコホームページ <http://www.usaco.co.jp/>

2000年1月 通巻第392号 日本洋書協会 編集者 高橋 紘
☎103-0027 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室 ☎(03)3271-6901 FAX.(03)3271-6920

印刷所=藤本総合印刷株式会社